

Jゼミの中間発表会が行われました！

●各班、これまでの研究成果を発表しました！

8月21日(金)午後2時より、国語・英語・地歴公民の3教科に分かれ、スクリーンを用いて発表会をおこないました。後期夏季補講も始まり、部活に予習・復習と忙しい中、これまでの研究成果を発表しました。

英語には公立小松大学の小原文衛先生、国語には石川工業高等専門学校の團野光晴先生、地歴公民には合同会社楽しい学校コンサルタントSecond代表 前田健志さんを助言者に迎え、多くの建設的なアドバイスを頂きました。また、参観の先生方からの質問や、生徒同士の質疑応答も充実したものになりました。発表会後のふりかえりも活発におこなわれており、今後の研究がより一層充実したものになることが大いに期待できそうです。

地歴公民A班：「いじめの加害者に着目する」



私たちの班は「いじめ」についての研究をしています。この研究テーマにした理由は、最近全国的にいじめが増えていると知ったからです。中間発表会を終えて、研究テーマの焦点を絞っていき、もっと研究を深めていきたいと考えています。

地歴公民B班：「彼らはなぜ迫害されたのか」



私たちは、迫害された民族について研究しています。現在問題視されている「迫害」という広義で曖昧な行為について歴史の面からその内容、理由を調べ、世界各地で起きている迫害の相違点・共通点を探ります。今後は時代背景を視野に研究していきます。

地歴公民C班：「QOLの向上にむけたテレワークの提案」



私たちは「リモートワークの導入とQOLの向上」について研究しています。リモートワークのみならず、QOLの観点に重きを置いて、様々な働き方を調査・分析し、自分たちが考える「豊かな暮らし」を実現できる最適な働き方を提案することが最終的な目標です。

国語D班:「死」から読み取る思想の違い



私たちD班は、平安時代から鎌倉時代にかけての古典文学作品における、登場人物の「死因」に注目し、各作品のテーマや思想の違いを明らかにしようとしています。今後の研究は「死生観」に着眼して、更に深く作品を読み込みます。

国語E班:「近代文学における、オノマトペの比較」



私たちE班は、宮澤賢治の詩に見られるオノマトペを抽出し、創作時期と表現の関係性を探っています。言語化できない感情表現・自然の有り様を言葉にする時に生まれるオノマトペ、という観点で、今後は研究を進めます。

英語F班:「外国人と仲良くなろう大作戦！」(仮)



グローバル化により、外国出身者との接点が増えている現代において、よりよいコミュニケーションをとるにはどうすればよいかを考察しています。今回の発表は「よいコミュニケーション=笑顔になれる会話」と定義し、「笑い」をキーワードに日本とアメリカの違いや共通点を研究しました。

英語G班:「小松高校の英語力UPのためにできること」



小松高校の生徒は英語学習に時間をかけ、また、モチベーションも高いが、英語を実際に使う、特に話すことにおいては自信がないということが、調査の結果わかりました。スピーキング能力を伸ばす授業スタイルや家庭学習法を提案し、英語力UPに貢献したいと思います。



日本人が英会話を苦手とする要因の1つに、発音の違いがあるのではないかと考えました。中でも、日本語と多く異なる英語の母音の発音トレーニングや、抑揚の付け方のトレーニングが有効ではないかと仮説を立てて、検証していく予定です。

●全ての班の発表後、助言者の先生方からコメントをいただきました！

團野先生からは、「具体的な方針の立て方、研究のマッピングを大事にしてほしい」との助言を頂きました。

オノマトペを宮沢賢治の作品から切り取って研究したE班には、「仮説を立て、実際に調べて検証し、仮定が必ずしも正しくなかったことを明確にした上で、次に進むというやり方は着実で良かった。」「オノマトペが文脈の中でどのような意味を持つのかを、そのオノマトペ自体が持つ感触とすり合わせながら追究していくと、面白い結果が出るのでは。」というアドバイスがありました。

文学作品上の登場人物の死因について研究したD班には、「大変意欲的で良いが、戦線が広がりすぎているため、歴史の先生に聞くなどして、平安から鎌倉期の宗教の移り変わりをざっと抑えてから対象を絞り込むと良いのではないか。」「興味深い死因を各自で話し合い、自分たちなりに疑問をぶつけて、自分たちなりに答えを出してみる。そしてそれが文脈の中でどのような意味を持つかをすり合わせてみると良い。」というアドバイスがありました。



前田先生は各班に「あなたはなぜその研究をしようと思ったのですか？」と問いかけられました。主体的に研究することが大事であることを最初に強調されました。「探究活動とは生きていくことと同じである。日々の生活は常に探究の連続である。」「楽しくなければ課題研究ではない。」と熱いメッセージをたくさんいただきました。



発表だけではなく、質疑応答にも助言をいただきました。「いまの質問はとてもよかったです。私もまさに同じことを質問しようと思っていました。」と言われた質問者はとても嬉しそうにしていました。

研究の進め方についてもアドバイスをいただきました。「書籍やネットでは十分なデータが得られません。ほかに方法はないのでしょうか。」という相談に対して「自分たちでアンケートを取る、その分野の研究者に直接話を聞く、などの方法があります。」とお答えくださり、今後の探究活動の指針を示していただきました。

小原先生からは、「先行研究はルールであり、先行研究につながらないものはただの『思いつき』にすぎない。」という言葉をいただきました。そして、今回の3つの研究は、この先もつながっていく可能性を持つ研究なので、しっかりと土台を作って進めていってほしいと励まされました。

そのためには、①定義や根拠を明解にすること、②仮説と「リサーチ・クエスチョン」とのつながりをしっかり構築すること、③データをどのように生かしていくかということ、の3つのポイントが重要とのことでした。特に、データについては、人文科学におけるデータの取り方や扱い方は自然科学の手法と常に同じではなく、「量的」に扱うよりも、「質的」に扱うことがあるそうです。また、自然科学と違い、答えは1つとは限らないので、自分たちの答えを、自信をもって追究しなさいというアドバイスをいただきました。



↑ 生徒同士の質疑応答の様子

今年度のJゼミは6月にスタートし、研究する時間も、発表会の準備も限られた中で進めてきましたが、どの班も猛暑に負けない熱意で討論を重ね、非常によい発表会になりました。プレゼンテーションの技術や質疑応答については、まだまだ向上の余地がありますが、今回の反省を生かし、次回のプレ発表会ではさらに進化した姿を見せてほしいと思っています。

【Jゼミ こぼれ話】

★その①文系だけと物理実験室！

発表会準備にはパソコンでの作業が欠かせません。密を避けるため、情報室だけでなく、他の部屋でもコンピュータを使うことになりました。Jゼミの幾つかの班は、SSH推進室でノートパソコンを借り、生物実験室・地学実験室・物理実験室で作業したのですが、特に、文系生徒がめったに入ることのない物理実験室は新鮮だったようです。「おお～初めて入った！」と感激する声もあがりました。

現在、情報室のパソコン入れ替えに伴う机の配置の変更・アクリルパネルの設置により、1クラス全員での使用が可能となりました。

↓ 新しいパソコンとアクリルパネルが入った情報室



★その②師匠の師匠がやってきた

英語班の助言者をしていただいた小原先生は、以前、金沢大学で教鞭をとられていました。今回、英語班の発表に参加した、Jゼミ指導者の1人である福岡先生、参観してくれた古谷先生は、2人とも小原先生の金大での教え子だそうです。小原先生は、「時期は違うけれども、それぞれの小原ゼミを代表する優秀な学生だった2人と再会でき、とても嬉しい」とおっしゃっていました。

英語班の発表では、師匠の小原先生、弟子の福岡先生・古谷先生からも多くの質問・コメントをいただき、さながら小原ゼミの再現となりました。

● 今後の予定 ●

令和2年12月08日(火) Jゼミ プレ発表会

令和3年 1月19日(火) Jゼミ 最終発表会

新型コロナウイルス感染拡大防止を徹底するため、例年と異なる形式での発表会となります。詳細は決定次第お知らせいたします。